

縁側のあるみんなの家



住民の帰りを見守る、行灯のような建物



閉鎖的な仮設住宅に対して、開放的で集まりやすい集会所

縁側のあるみんなの家

熊本地震により甚大な被害を受けた熊本県西原村。縁側のあるみんなの家は、熊本県が設置する「本格型みんなの家」として、西原村小森仮設団地内に住民の意見を取り入れて設計した集会所である。今回の地震は、木構造に対する信頼を県民から少なからず奪っている。よって、その信頼回復を図る為には木構造の可能性を分かりやすいカタチで示す必要があった。また仮設生活をおくる住民の拠り所として「みんな意識」を自然と感ずることが出来るように、東屋のようなプリミティブ空間に、人が集まる仕掛けとして縁側を設けた。住民との意見交換会では「鍵はかけなくていい」という意見が出るほど開放性への理解があった。実際に誰かが何をしているのか一目でわかるので、日常的に住民意識がみんなの家に集まる。子供からお年寄りまで気兼ねなく縁側に座り、どこからでも人が集まる。室内からも西原村の原風景を感じる事ができるので、復興に向けた地域への想いも色あせることは無いと実感する。この建築は開放性を持たせるために耐力壁を設けていない。代わりに柱脚を方杖で固め耐力を保持している。方杖部分にはベンチを設けることで縁側機能を増幅させている。「木の可能性」を表現した構造形式が生み出す開放性。その開放性が生み出す「みんな意識」。これらが同格の位置づけとして建築を形成し、復興へと繋がる事を期待している。

